



北方民族博物館だより

No. 107



D5.2.4 小型獣用罠^{わな} アリュート アラスカ/アクタン島（推定） 1995年寄贈
43.1 x 23.0 x 8.5cm 大島稔氏収集

木製の胴の内部に強くねじったヒモを張り、その反発力でトゲのついた棒を振りおろし、動物（主にキツネ）を捕獲する罠である。象嵌^{そうがらん}された「B.T.」は製作者のイニシャルだという。

ほぼ同型の罠は西シベリアからカムチャツカ半島を経由して、アリューシャン列島やアラスカ沿岸部にまで普及しており、「ウラル・シベリア型」と分類されている。北米にはロシアの進出に伴い普及したものと考えられるが、チュコト半島のチュクチとアラスカのエスキモーとの間の先住民間交易も、アラスカでの普及の一翼を担ったと考えられる。

目次 Contents

- 1 表紙 小型獣用罠
- 2 - 4 第32回北方民族文化シンポジウム網走「環北太平洋地域の伝統と文化2 アムール下流域・沿海地方」
- 5 特別展開連講演会「カザフ草原の暮らしとウマ」
／講座「モンゴル国のカザフー遊牧文化と暮らしのなかの刺繍」
講習会「カザフかぎ針刺繍入門」
- 6 講習会「アイヌ文化講習会ーアイヌ刺繍入門 カパラミプ」
／ロビー展「北のメカニクスー狩猟ワナの仕組み」
- 7 講座「狩りを学ぶ、文化を伝えるーアラスカ先住民社会の文化復興と野外教育」
／講座「オホーツク文化の遺跡立地」
- 8 INFORMATION

第32回北方民族文化シンポジウム網走

環北太平洋地域の伝統と文化 2 アムール下流域・沿海地方

2017. 10. 7-8

北太平洋を取り囲む地域は、自然環境や生物資源だけでなく、文化的にも類似性や共通性が指摘されてきました。今回のシンポジウムではアムール下流域・沿海地方を対象地域とし、内外から8名の研究者にお越しいただき、多様な視点からその先史文化、歴史、民族文化を検討しました。以下に各発表の概要を紹介します。

* * *

第1部：ロシア沿海地方の先史文化（座長：中村和之氏（函館工業高等専門学校））

「考古学から見る渤海時代のロシア沿海地方」小嶋芳孝氏（金沢学院大学文学部）

渤海は698年に建国され、926年に滅亡した。ロシア沿海地方の南部は、その重要な支配領域で、日本海に面したクラスキノ城跡（竜原府塩州城）は、日本と渤海を往来する船が停泊する港を管理していたと推定されている。『新唐書』には、渤海の王都・上京から日本に至る経路を「日本道」と記されている。沿海地方南部と中部の境界にあるウスリースク市を流れるラズドリナヤ川西岸では、渤海時代の宗教関連遺跡が4ヵ所見つかっている。

ラズドリナヤ川東岸に広がる沿海地方中部にある城跡の多くは、これまで渤海時代の遺跡と報告されてきた。しかし近年の調査で、そのほとんどが10世紀に造営されたことが判明している。ラズドリナヤ川から50km東にあるゴルバトカ城跡は、数少ない渤海の平地城で、発掘調査で多数のるつぼが出土している。るつぼの内側には溶解した金や銅・鉛などが付着しており、ゴルバトカ城跡で金属精錬がおこなわれたことを示唆している。沿海地方中部のシホテアリン山脈で採掘された鉱物資源が、ゴルバトカ城跡で精錬されていたと思われる。



小嶋芳孝氏

「ロシア極東の金代女真遺跡—沿海地方を中心に」臼杵勲氏（札幌学院大学人文学部）

女真集団の発祥地である中国東北部とロシア極東には、金代の女真関連遺跡が分布している。特にロシア沿海地方には保存状況が良好な遺跡が集中しており、それらの検討によって当時の女真社会の状態を推測することができる。

都市・城郭の存在は、人口の集中や、行政・軍事に関わる組織・制度が構築されていたことを示しており、その規模や立地条件によって異なる機能を果たしていたと思われる。経済の基盤となる農業生産は、役畜や鉄製農具の普及により一定の水準に達していたと考えられる。陶磁器や鉄製品の普及状況から、窯業や製鉄などの各種生産活動や製品の供給が行われていたことも明らかになっている。さらに、中国産の商品・貨幣が流通していたことから、金代のロシア沿海地方が東アジアを中心とする交易圏の中に組み込まれていたこともわかる。しかし、城郭遺跡内に統治者を頂点とする強力な階層構造を示すような施設が見られなかったことから、階層性が比較的稀薄な社会が想定される。このことが、女真集団を中心とした金王朝の弱体化をまねいた可能性がある。



臼杵 勲氏

第2部：アムール下流域の歴史と文化（座長：佐々木史郎氏（国立アイヌ民族博物館設立準備室））

「女真と胡里改：鉄資源とその加工技術の行方に見る完顔部の勃興」井黒忍氏（大谷大学文学部）

本発表では、ツングース系集団である完顔部が勃興した要因として、鉄資源とその加工技術を取り上げる。鍛鉄を業とする職能集団であったツングース系の集団・胡里改は、敦化地方を根拠地として鉄製武器の製造と販売を半ば独占的に行っていた。胡里改は、牡丹江流域から図們江下流域の諸集団と協力して完顔部への侵攻を繰り返したが、完顔部は遼の権威を利用しつつ、日本海沿岸部の集団を取り込み、南北からの挟撃によって反対勢力を打倒した。

胡里改らを吸収し、鉄資源とその加工技術を手に入れた完顔部は、その後東北アジアの諸集団を統一し、金の建国を成し遂げる。完顔部に敗れた胡里改だが、金代には牡丹江流域、松花江中流域からアムール川下流域の広大な土地にその名を冠した胡里改路という行政区画が設けられ、元代には同地域の女直を管轄する役所の一つとして胡里改万户府が設置される。さらに明代には松花江上流域および図

們江流域へと移住し、後にヌルハチを出すこととなる建州女直を構成するなど、12～16世紀まで東北アジアに足跡を残し続けた稀有な集団であった。



井黒 忍氏

「アムール河下流域における明朝と先住民との朝貢交易」 中村和之氏

明朝三代の皇帝である永楽帝は、イシハという人物に命じ、1413～1433年にアムール河下流域に遠征航海をおこなわせ、アムール河下流のティル村にヌルガン都司を建設させた。ツングース系の女真人だった亦失哈は、明初の艦隊司令官であり、宦官でもあった。同時期に、鄭和というもう一人の艦隊司令官、宦官がいた。鄭氏はイスラム教徒で、同じく永楽帝より1405～1433年に東南アジア、南アジア、西アジア、東アフリカへの遠征を命じられた。

亦失哈は、ティルの丘にヌルガン永寧寺と呼ばれる仏寺を建立し、寺の前に二つの石碑を建てた。最初の碑は1413年に建てられ、漢語・モンゴル語・女真語の碑文が記されている。2番目の碑は1433年に建てられ、漢語の碑文だけが残されている。これらの二つの石碑は、明朝と先住民との間の朝貢交易を記録したものであり、その碑文によって、明朝の役人が苦夷（アイヌ）や吉列迷（ニブフ）に錦やほかの品物を下賜していたことがわかる。その後、明朝の弱体化とともに朝貢交易は衰退し、やがてヌルガン都司があったことも忘れられた。現在もヌルガン都司の役所の位置などは明らかになっていない。一方、1995～2000年のロシア側の発掘調査により、永寧寺の跡が確認されている。



中村和之氏

第3部：アムール下流域の先住民と生業文化（座長：田口洋美氏（東北芸術工科大学））

「アムール川下流域と沿海地方の狩猟と漁業—その用具と技術の変遷」佐々木史郎氏

狩猟と漁業は人類の「原初的な」生産活動であるとされてきた。その研究は、自然環境に対する適応あるいは調和という視点からのものが多く、生きるために必要な食料や生活物資を手に入れるための活動であるということを暗黙の前提としていた。しかし、近代資本主義経済が確立される以前から、この両活動は余剰生産物や威信財を生み出し、それだけでは説明しきれない側面を持っていた。

本報告では、アムール川下流域の先住民族の18～20世紀における狩猟と漁業の用具と技術の変遷を通覧した。その結果、銃やナイロン製の刺網といった物資面だけでなく、通信手段など情報の面でも外来の技術や物資に頼る「脱ローカル化」が生じていることが示された。こうした状況は、地域の先住民族が近代の社会的・経済的状况に「適応」していると考えられる。しかし、一方でこうした状況は世界経済や世界政治と直結しているため、その動向が即座に地域を直撃してしまうのである。



佐々木史郎氏

「ウデへの丸木舟ウトゥンゲ」アンドレイ サマル氏（ロシア科学アカデミー極東支部 歴史・考古・民族学研究所）

ウデへはビキン川流域で野生動物を狩猟し、有用植物を採集してきた。こうした生業活動における移動は、丸木舟なしには考えられない。ウデへの丸木舟は船尾と船首の構造から、アムール型の2つのタイプとして扱われている。



アンドレイ サマル氏

丸木舟の底は丸く、船尾と船首は尖り、輸送、漁労、狩猟に適した形になっている。櫂には両刃のものと2本1組の短くて片刃の2タイプがある。浅瀬では竿が使われた。

舟は春から秋にかけて、シナノキ、サルヤナギ、ハコヤナギを材料として製作され、それに伴って儀式がおこなわれた。まず樹皮をはぎ、丸太を両端が尖った形に加工し、斧で丸太の内部をくりぬいていく。日光の当たり具合に合わせ、幹の北側に向いていた部分を底に、南側に向いていた部分を上にして作られた。舟は棺として利用されることもあった。舟の形態は、深くえぐられた丸木舟から完全な縁を持つ舟へと進化した。丸木舟を作り出して以来、人はその操船技術や使用方法を確立してきたのである。

第4部：ロシア沿海地方における先住民言語（座長：津曲敏郎（北海道立北方民族博物館））

「地域言語学的観点から見た東ツングース諸語」^{ベクサンヤフ} 白尚燁氏（室蘭工業大学国際国流センター）

ツングース諸語は、同一系統の10～11ほどの言語で構成される語族で、北ツングース諸語、東ツングース諸語、南ツングース諸語の3グループに分類できる。広い範囲に分布するため、ツングース諸語は、古アジア諸語、チュルク諸語、ロシア語、モンゴル諸語、中国語などの系統の異なる多様な言語と隣接している。本発表では、3人称標示、補助動詞の2つのパラメータにより、3グループのツングース諸語を比較・対照することで、東ツングース諸語の文法的位置づけを明らかにすることを目的とした。

その結果、ツングース諸語は、その地域的分布と文法的相違が相関する傾向が確認できた。特に、東ツングース諸語は、北ツングース諸語と南ツングース諸語の中間的な文法的特徴を維持していることから、地域的分布が文法変容と大きく関わっていることが示唆される。この現象は、それぞれ異なる周辺言語による影響、ないし同一周辺言語による影響度合いによって説明できると考えられる。



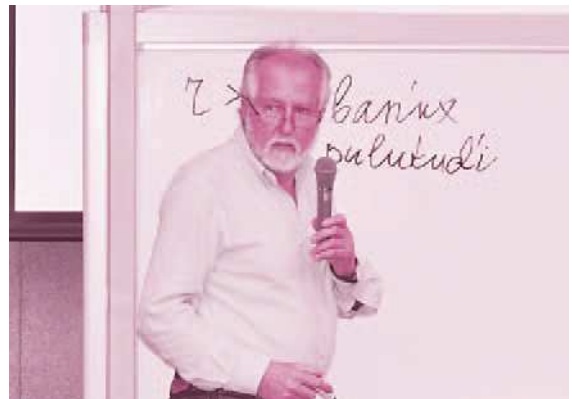
白 尚燁氏

「アムール下流域における歴史的な民族接触の言語学的証拠について」アレクサンドル ペヴノフ氏（ロシア科学アカデミー・言語学研究所）

本発表ではアムール下流域におけるここ数百年の言語的・民族的景観の変化について、言語学的証拠から検討する。

まず、ネギダール語の基礎になった言語について、多くの事実がオロチ語に近いことを示している。数百年前、アムグン川沿岸（特に河口付近）にはオロチが住み、西エベンキ語の方言やエベン語の方言と類似した北ツングース語（ネギダール語の基礎になった言語）を話すようになっていたと考えられる。

第二のテーマは、ニブフ語とツングース・満洲諸語との接触についてである。ニブフ語からネギダール語、ウリチ語、ナナイ語、オロチ語への語彙の借用は少ないが、ニブフ語には多くのツングース・満洲諸語起源の単語が存在する。また、ニブフ語には、アムール下流域のツングース諸語にはみられない満洲語起源の語彙が含まれる。このことは、満洲語からニブフ語に直接的な語彙借用があったこと、さらに明代、清代にアムール川下流域でニブフと満洲族の接触があったことを示すものである。



アレクサンドル ペヴノフ氏

* * *

最後にコメンテーターの荻原眞子氏（千葉大学名誉教授）に講評いただきました。短い時間でしたが、皆様のご協力により、実り多いシンポジウムとなりました。

なお、シンポジウム関連事業として、9月21日（木）午後6時半より、オホーツク・文化交流センターで嵯峨治彦氏、嵯峨孝子氏によるコンサート「草原の音楽～馬頭琴と喉歌」をおこないました。コンサートには、網走市や近隣市町村の住民を中心に199名の入場者がありました。

（学芸グループ 中田 篤）



嵯峨治彦氏・嵯峨孝子氏

特別展関連講演会

カザフ草原の暮らしとウマ

2017. 9. 17

講師：藤本透子氏（国立民族学博物館准教授）

特別展「ユーラシア北方のウマ牧畜民」の関連事業として、ユーラシアの草原に暮らすカザフの事例から、人とウマとの関係について講演いただきました。

まず、日本人には馴染みのないカザフスタンの概要、そしてカザフスタン成立以前のユーラシア草原地帯におけるウマ利用の歴史についてお話しいただきました。

次に、講師の現地調査の体験から、カザフスタンの草原地域における人とウマとの関わりについて紹介いただきました。講師の調査地であるパヴロダル州のサルセンバエフ村管区では、住民の主要な生業は牧畜で、ウマのほか、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダが飼われています。ウマに関しては、夏季（4～10月）には村から離れた草原で牧夫が請け負って放牧し、冬季（11～3月）には村で、ウマを所有する村人が輪番制で日帰り放牧をしています。放牧の負担は大きいのですが、それでも彼らがウマを飼うのは、生活の様々な側面でウマが重要な存在となっているからです。

ウマは騎乗の対象として大切な役割を果たしています。ウシやウマの放牧は、騎乗なしでは大変です。また、祝祭や大きな儀礼の際には、競馬と馬上競技が欠かせません。

食用としてのウマの役割も重要です。カザフ文化では、馬乳酒と馬肉が最高のご馳走とされています。夏には馬乳酒が作られ、初冬にはウマを屠り、腸詰に加工したりして保存します。

ウマは人生儀礼との関わり点でも大切な存在です。結婚の際、婿側から嫁側への贈物にはウマが必ず含まれています。また、葬儀や一年忌の際には、故人のウマを屠って一緒に食べ、その後に馬上競技や競馬をおこないます。

このように、カザフスタンでは今もウマが社会的・文化的に重要な存在なのです。

（学芸グループ 中田 篤）



藤本透子氏

特別展関連事業

講座 モンゴル国のカザフ

遊牧文化と暮らしのなかの刺繡^{しゅう}

2017. 9. 30

講習会 カザフかぎ針刺繡入門

2017. 10. 1

講師：廣田千恵子氏（千葉大学大学院博士後期課程）

モンゴル国のカザフ文化を研究している講師を招き、2日連続で普及事業をおこないました。

1日目の講座では、カザフの遊牧文化、そして日常生活の中で使われ、受け継がれている様々な装飾文化について、スライドを使って説明していただきました。

まず、モンゴル国に暮らすカザフの歴史的背景、彼らが住むモンゴル国西部のバヤン・ウルギー県の自然環境などについてお話しいただきました。また、伝統的な天幕式住居での生活や牧畜民の日常について紹介いただきました。

そして、カザフの装飾文化としてかぎ針刺繡を取り上げ、その材料や技法などの特徴、刺繡を施して作られる壁掛けや敷物について解説いただきました。こうした刺繡には、厳しい自然のなかで共に暮らす家族を大切にする気持ちが込められているということです。

続く2日目は、このカザフ刺繡を実際に体験する講習会をおこないました。まず文様を描いた布を枠に固定し、次にかぎ針を使ってその布に刺繡を施していきます。布にかぎ針を刺して刺繡糸を輪状に引き出し、その輪のなかから次の糸を引き出すという具合に、鎖編みのような形で刺繡をつなげていきます。単純ですが、かぎ針が布に引っかかるなど、要領をつかむまではなかなか難しい作業でした。結局、予定していたコースターを時間内に完成させることはできませんでしたが、刺繡の体験という点では多くの方に満足いただけたようです。

（学芸グループ 中田 篤）



刺繡を指導する廣田千恵子氏（左）

講習会

アイヌ文化講習会

アイヌ刺繡入門 しゅう カパラミプ

2017. 10. 21

講師：西田香代子氏（アイヌ文化伝承者）

北海道アイヌ協会優秀工芸師の西田香代子氏に、昨年引き続き講師をお引き受けいただき、アイヌ刺繡しゅうの講習会を開催しました。



西田香代子氏

これまでのアイヌ刺繡の講習会では、糸のみで刺繡をする技法を学んできましたが、今回は布も用いるカパラミプという

技法に挑戦しました。また、できあがった刺繡作品を普段使いができるようにと、文庫本用のブックカバーに仕立てることにしました。

材料はベースになる藍染めの木綿布と、白の木綿布、刺し子糸、刺繡糸としつけ糸です。

まず、講師オリジナルの文様を描いた白の木綿布を、藍染めの木綿布にしつけをかけます。このしつけがとても大事な工程になります。

次に白の木綿布の文様の外側5mmのところをはさみで切ります。そして、針の先で白の木綿布の縁を内側に折り返しながら、白い刺し子糸で、かがってゆきます。アイヌ語でこの時に使うステッチをイカカリ（コーチングステッチ）といいます。ポイントは、このイカカリを文様の端から始めず、大きなカーブのところから始めるということです。またイカカリは、ほんの少し戻しながら前に進むという縫い方になります。

次に青い刺し子糸二本を使ってイカカリをします。このとき一筆書きするようにして刺繡してゆき、端にはキラウとよばれるとがりをつけます。

最後にひし形部分に刺繡糸でオホ（チェーンステッチ）をすると刺繡は完成です。

講師の要所をおさえた熱心な指導で、全員が時間内に目処をつけることができました。

（学芸グループ 笹倉 いる美）

ロビー展

北のメカニクス

狩猟ワナの仕組み

2017. 10. 28-11. 26

「ワナ」は日常生活の様々な機会に耳にする言葉です。経済のワナ、ビジネスのワナ、恋のワナなど、比較的ネガティブな意味で用いられることが多いのではないのでしょうか。しかし、本来の狩猟具としてのワナは、使用者にとって恩恵の多い便利なものでした。ワナを使うことで人は効率的にかつ安全に、様々な動物や鳥類、魚類を捕獲することができます。

本ロビー展では、当館と斜里町立知床博物館の所蔵資料から北方民族の歴史とワナのメカニズムについて紹介しました。知床博物館からは平取町の川奈野一信氏制作資料を借用し、アイヌの様々なワナも紹介することができました。

今回は北方のワナを仕組みごとに分類し、展示を行いました。陸獣用のワナに限れば、食料ではなく毛皮を獲得するために使用されたワナが多くを占めます。こうしたワナは16世紀以降、北方先住民が大国の毛皮交易と貨幣経済に組み込まれていく中で普及していきました。本紙表紙で紹介したアリュートのワナもそのような歴史を持つ資料の一つです。

今回の展示の特徴として実際に触れることのできる体験用資料や映像、図版を通じて、ワナのメカニズムを感覚的に理解できるようにしたことがあります。例えばトラバサミは現在の北方世界でも用いられている重要なワナですが、非常に危険であるため、直接手に触れていただくことはできません。そこで当館学芸員が実際にトラバサミを動かす映像を撮影し、どのような仕組みでワナが作動するのかを映像を通じて説明しました。実際に手に触れて動かすことの出来る模型は特に好評でした。

またワナの展示であるため、展示会場に「仕掛け弓」を仕掛ける工夫を行いました。もちろん矢は発射されませんが、鑑賞順路に突然現われる仕掛け弓に、来館者も楽しんでいただけたようです。

（学芸グループ 野口 泰弥）



仕掛け弓の展示

講座

狩りを学ぶ、文化を伝える アラスカ先住民社会の文化復興と野外教育

2017. 11. 18

講師：近藤祉秋氏

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教)

ロビー展「北のメカニクスー狩猟ワナの仕組み」の関連講座として北海道大学の近藤祉秋氏にお越しいただき、アラスカ先住民社会の現代の狩猟/漁労活動や「文化キャンプ」と呼ばれる、伝統的な技術や知恵を次世代に伝える泊まりこみの教育活動について紹介いただきました。



近藤祉秋氏

近藤氏はアラスカのニコライ村を中心に長期の現地調査を行ってきました。ニコライ村は北方アサバスカンの「ディチナニク人」（当館ではアップパー・クスコクィム）が主要な

構成員となっています。彼らは通年で様々な動物や鳥類、魚類を狩猟/漁労する一方で、労働者としての現金収入も得ており、彼らの経済は自然経済と現金経済が混ざり合った混合経済と定義することができます。

冬期は毛皮獣のワナ猟が行われます。特にこの時期のビーバー猟は、凍結した湖面に穴をあけ、くくりワナを仕掛けて捕獲します。ワナは現在のアラスカ先住民の狩猟文化、食文化の中でも重要な物であると言えます。

一般的に食料は民族の主権と強く結びつきます。アラスカでは1960年代以降、ヤナを用いた漁法が禁止され、また猟期が厳しく定められたことによって、アラスカ先住民が長年受け継いできた生業活動や食文化に制限がかけられることになりました。伝統的な生業と食文化を復興させたり、それが継続できる環境を整えたりすることは、主権を獲得し民族自決につながる一歩であると言えます。

文化キャンプはそのような取り組みの一つとして理解することができます。文化キャンプは年に複数回行われ、水鳥猟、網猟、ビーズ細工、サケ漁、ヘラジカ猟、氷下漁、解体や調理が行われます。文化キャンプでは現在の古老たちが子供だった時代の生活について教育が行われますが、これは現在の混合経済の崩壊後も生き残るための技術を身に付けるためとされています。混合経済の中に生きながら、その崩壊を予見し、主権を取り戻したその後の生活を見据える生き方に、アラスカ先住民社会の現在の姿や問題を知ることができました。

(学芸グループ 野口 泰弥)

講座

オホーツク文化の遺跡立地

2017. 11. 25

講師：種石 悠 （当館 学芸員）

オホーツク文化人は、どこに暮らしたのか？ 講座では、北海道内の著名なオホーツク文化遺跡の立地を概観し、その傾向を探りました。講座で紹介した遺跡は、礼文町浜中2遺跡・香深井1遺跡・元地遺跡、利尻町亦稚貝塚、利尻富士町役場遺跡、稚内市抜海岩陰遺跡・オンコロマナイ1遺跡、枝幸町目梨泊遺跡・音標ゴメ島遺跡、湧別町川西オホーツク遺跡、北見市常呂川河口遺跡・トコロチャシ跡遺跡、網走市二ツ岩遺跡・モヨロ貝塚、斜里町チャシコツ岬上遺跡・知床岬遺跡、羅臼町オタフク岩遺跡第1地点・オタフク岩洞窟遺跡・松法川北岸遺跡、標津町カリカリウス遺跡、根室市弁天島遺跡・トーサムボロ湖周辺堅穴群・オンネモト遺跡などです。

これら遺跡の立地をみると、大きく次の4パターンに分かれます。①河口近くの標高が低い砂丘上など。②海に臨む標高20～40mの高い段丘上など。③洞窟や岩陰。④周囲1kmほどの小島。

また、海のすぐ近くに住むイメージが強いオホーツク文化人ですが、例外もあります。川西オホーツク遺跡や斜里町ウエンベツ河口遺跡は、海から1km程も離れた場所に立地しています。

オホーツク文化の遺跡立地は多様です。北方民族は一般に、夏と冬に季節移動し、住居も使い分けることが多いのですが、遺跡で捨てられた魚や動物の骨をみると、オホーツク文化人は年間を通じて同じ場所を使っていたことがわかります。多様な遺跡立地は、拠点となった集落、狩りや漁のためのキャンプ地、あるいはお墓などのように、土地利用に使い分けがあったことを示しているのではないのでしょうか。



会場の様子

(学芸グループ 種石 悠)

ロビー展 オホーツクシリーズ11「北の状景から」

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」。第11回目は、この時期恒例の写真展「北の状景から」です。オホーツク地域に縁のあるアマチュアカメラマンの作品により、豊かな自然や人びとの日常生活、イベントの風景など、オホーツク地域の魅力を切り取った一コマを紹介します。

- 会期：平成30年1月6日(土)～1月21日(日) 観覧無料
- 会場：北方民族博物館・特別展示室
- 主催：北海道立北方民族博物館

企画展 永遠のジャッカ・ドフニ

—北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニの35年間—

北方民族博物館が一括収蔵した資料により、かつて網走にあった北方少数民族資料館、ジャッカ・ドフニの活動を紹介します。

- 会期：平成30年2月3日(土)～3月31日(土) 観覧無料
- 会場：北方民族博物館特別展示室
- 主催：北海道立北方民族博物館

関連事業

- 2月20日(火) 10:00-12:00 講習会 ウイルタのミトン「マンバッカ」づくり
- 2月25日(日) 10:00-11:30 企画展展示解説会
- 3月11日(日) 9:30-12:00 講習会 ウイルタ刺繍の財布作り(講師：フレップ会会員)
- 3月24日(土) 10:00-11:30 講座 先住民文化について語る、ということ
～オーストラリア アボリジニからジャッカ・ドフニへの道～
(講師：中村和恵 明治大学教授)



ジャッカ・ドフニの
パンフレット

INFORMATION

行事報告

- ◆9月2日(土) はくぶつかんクラブ「手作りバターと簡単チーズ」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。



調理する参加者

- ◆9月9日(土) 講習会「編んで作るグリーンランドのリストウォーマーづくり」(講師：結城伸子氏)を開催しました。



指導する結城伸子氏

- ◆9月10日(日) 講習会「北欧の錫糸細工プレスレットづくり」(講

師：結城伸子氏)を開催しました。

- ◆9月16日(土) はくぶつかんクラブ「革でつくる眼鏡入れ」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。



完成した作品を手にする参加者

- ◆11月3日(金・祝) 第9回はくぶつかんまつりを開催し、モルック体験、マシュマロ焼き体験などを実施しました。



モンゴル衣装を体験する来館者

- ◆11月4日(土) 解説会「ロビー展展示解説会」(講師：野口泰弥学芸員)を開催しました。

- ◆11月11日(土) はくぶつかんクラブ「カラフルまが玉づくり」(講師：平栗美紅解説員)を開催しました。

報告

- ◆12月6日(水) 当館職員向けに普通救命講習、ハロン消火設備研修を実施しました。

北方民族博物館だより No. 107

平成29(2017)年12月22日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会